

「秋吉台の聖者」 本間俊平物語

1873(明治6)年～1948(昭和23)年

1873年(明治6年)新潟県に生まれる。小学校卒業後、中等科に進むも家庭の困窮から中途退学を余儀なくされる。14歳のとき福島県の大工に弟子入りをするが、その四年後、植村正久らによるキリスト教講演を聞き、他の大工たちと共に講演を妨害する。ところが「自分たちは殺されても、諸君を不安恐怖の火の中から救い出そうとされた主イエス・キリストの流し給える血を証明せねばならない」との必死の訴えに心打たれ、以後、真剣に求道。そしてついに1897年(明治30年)、東京霊南坂教会で留岡幸助より洗礼を受けるに至った。



その後、宮内省東宮御所(今の迎賓館)を建設する役所に勤めていたとき、大理石の調査で秋吉へ赴いたが、山の所有者から見込まれ、宮内省を退職し、秋吉台で初めて本格的に大理石を採掘する「長門大理石採掘所」を開設した。

他の鉱山と違うのは、非行に走った少年や刑務所を出所した人たちを雇って共に働きながら更生へと導いたことである。休日には、山や谷を越えて遠くから説教を聞きに来るものも少なくなかった。

大理石採掘事業は何度も存続の危機にさらされたが、ついに芝浦製作所(東芝の前身)の配電盤をほぼ全面的に受注し、海外にまで大理石を販売するほど安定し、今日の大理石産業の礎が築かれた。

秋吉を拠点に全国各地で講演やキリスト教伝道を行っていた本間は、いつの間にか「秋吉台の聖者」と呼ばれるようになっていた。事業を次男に託した後は、中央に出て、執筆や講演活動を活発に繰り広げ、講演地は日本全土、満州、樺太にまで及んだという。

伊藤博文と下関の春帆楼上で会見したとき、「朝鮮総督府に出てみないか」と誘われたが、「公爵閣下、私が総督府に出仕すれば、今私が託せられている可哀想な青年たちを、閣下は私に代って其の感化がして頂けますか」と答え、伊藤は二の句が告げなかった、というエピソードが残っている。

今回は先見の明をもった事業家、教育者、伝道者として大きな足跡を残した本間俊平の生涯を辿ります。

記

1. 日時 : 2017年10月13日(金) 10:30 AM より
2. 場所 : ゴスペルホール(電話 026-295-6705)
3. 講師 : 尾崎富雄(ゴスペルホール代表)